

企画 5 | 地域づくりをデザインでサポートする

団体の名称

工学部 デザイン学科 工藤研究室

代表者氏名・学部学科名等

新井 信頼
工学部工業デザイン学科 4年

実施期間・日程

平成23年6月13日～11月26日

- 6月13日 「ふるさと資料室」運営委員会に参加
- 8月 4日 東京都福生市民俗資料館にて膳椀倉の調査
- 8月14日 「ふるさと資料室」運営委員会に参加
- 9月12日 神かほり氏案内のもと八王子市内に現存する椀倉めぐり
- 9月18日 「ふるさと資料室」運営委員会に参加
- 9月25日 糠信富雄氏案内のもと八王子市みなみ野の椀倉の跡地めぐり
- 9月29日 八王子市寺町学童で、第1回ワークショップの開催
- 10月14日 拓殖大学 紅陵祭 活動状況報告展示
- 11月 5日 八王子市寺町学童で、第2回ワークショップの開催
- 11月13日 「ふるさと資料室」運営委員会に参加
- 11月25日 八王子市七国中学校総合学習「めかご教室」に講師として参加
- 11月26日 八王子市みなみ野 由井市民センターみなみ野分館「ぶんか展」にて第3回ワークショップの開催

実施内容

八王子みなみ野シティは、八王子市南部の丘陵地域に広がるニュータウンである。街びらきは1997（平成9）年3月で、人口は2010（平成22）年5月現在、2万人超を数える。かつて、この地域には、6つの谷戸集落があり、それぞれ「椀蔵（わんぐら）」と呼ばれる共有倉庫を有していた。椀蔵は、集落の冠婚葬祭や寄り合い等で用いる食器類や座布団など、共有の財産を保管するものであった。しかし、その必要性は、生活の近代化とともに薄れていく。1999（平成11）年初頭には、閑道谷戸に残っていた最後の椀蔵が取り壊された。

基本的に、ニュータウンは、その土地の歴史や生活文化と無関係に造成され、多くの住民の多くが新規の転入者となる。このような街で、安定した地域社会を育てていくためには、住民間コミュニケーションの仕組みづくりとともに、次代を担う若年層に対する地域学習が重要となる。

本企画は、2010（平成22）年に八王子みなみ野駅前に開館した由井市民センターみなみ野分館の地域学習コンテンツと

して、レゴブロックを教材としたワークショップ『わんぐらをつくろう！』を提案、実施したものである。

ワークショップの仕様設定に際しては、まず、上記のみなみ野分館の館長を務める糠信富雄氏より、谷戸集落と椀蔵に関して教授を受けた。次に、八王子地域の共有膳椀蔵に詳しい神かほり氏の調査報告に学び、氏の引率により、現存する事例を巡った。以上の調査から得られた知見をもとに、かつての農山村で椀蔵が果たしていた役割を考察し、現代の子どもたちに、その存在を伝える意義を確認した。すなわち、「共有」という行為の社会的象徴として、椀蔵をとらえることとした。

ワークショップの実施については、八王子市寺町学童保育所の協力を得て、平成23年9月29日（土）および11月5日（土）に検証をおこない、内容の修正をおこなった。最終的に、糠信氏をはじめとする関係者のご理解とご協力のもと、同年11月25～27日（金～日）に開催された1周年記念文化展のなかで実施、地域の子どもたちの参加を得ることができた。

成果

本企画のねらいは、ワークショップとしての仕様を設定することと、八王子みなみ野シティにおけるワークショップ実施の2点であった。

まず、仕様については、前述のとおり2度の検証をおおし、以下のように設定した。手順については、由井市民センターみなみ野分館はもとより、周辺の学童保育所等においても、地域の大人が指導者となり、手近なレゴブロックを用いて、1時間程度で実施できるよう工夫した。例えば、ワークショップでは、「わんぐら」の収納物を使用する「行為」の表現に焦点をあてた。すなわち、「わんぐら」自体は、事前に制作しておき、共通アイテムとして配布した。

成果1：地域学習ワークショップ「わんぐらをつくろう！」

仕様設定

指導者：1名（参加人数に応じてサポート若干名）

対象：小学生（ひらがなの読み書き力を必要とする）

人数：最大10名

会場：8畳程度

時間：約60分

教材：椀蔵に関する説明パネル（A1・3枚）、設定用紙（A4・1枚）、レゴブロック（基本セット5508・5個、同セット6177・5個、基礎板620・5個、626・5個、フィギュアセット9348・1個）

手順：①椀蔵の説明（説明パネル使用：10分）

②「わんぐら」の設定（設定用紙使用：10分）

③共通アイテム「わんぐら」と基礎板の配布

④オリジナルの「わんぐら」制作（30分）

⑤感想の記述、記念写真の撮影（10分）

⑥写真プレゼント

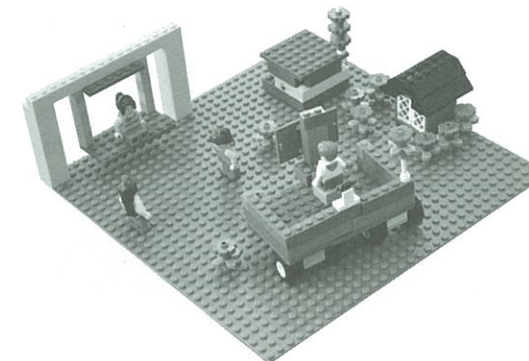
成果2：「わんぐらをつくろう！」の実施

八王子市由井市民センターみなみ野分館の開設1周年を記念した「文化展」において、ワークショップを実施した。小学生に限れば、一日で10名の参加者を得ることができた。参加者の多くは、同展の案内チラシをみて参加した親子連れであり、体験学習に対する関心の高さを知ることができた。

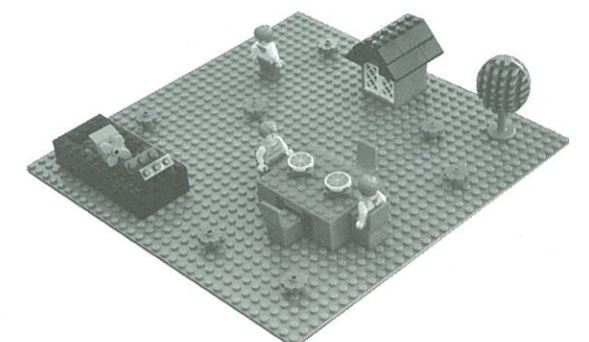
子どもたちが制作した「わんぐら」をみると、例外無く集中して楽しんでくれたようである。制作後のアンケートには、「みんなで、わんぐらの中に入っているもので遊びたいです。時間を忘れてやってしまいました。楽しかったです。」などの感想をみるることができた。

ワークショップ中、保護者と意見交換する機会もあった。そのなかで、「私たちがのような新規移住者にとって、椀蔵をはじめとする地元の文化について知ること、特に子どもが遊びをとおして触れることは、素晴らしいことだと思う。私自身も、地元の方々との話題づくりが出来た。」との意見が得られたことは、私たちにとって大きな喜びであった。

文化展の運営委員の方々からも、ワークショップの開催に対して、「みなみ野の文化を若い人間に理解してもらい、私たちと一緒にみなみ野の文化を伝えてもらう事は大変うれしい」との意見を頂いた。



児童作品 遊具が入ったわんぐらの遊びの風景



児童作品 BBQセットを入れたわんぐら遊びの風景

反省点・感想及び意見

本企画については、ワークショップを当該地域で実施するという、ほぼ当初の計画を遂行することができた。特に、市民センター分館の開設1周年を記念する文化展に参加し、参加の親子に好評を得たことは、大きな収穫であった。

この一年、八王子地域の地域活動に参加して感じたことは、体験学習を含め、地域教育のためのコンテンツが定型化し、

魅力に乏しいということである。もちろん、さまざまな団体が、それぞれの事情にあわせて、個別に実施しているためでもある。しかし、今回取り上げたニュータウンに限らず、全国的に、新たな地域づくりが求められている。このような社会的要求に応える意味でも、デザイン学科ならではの発想と現実化を活かした地域づくりが効果を発揮するだろう。

今後の計画・展望

研究室では、来年度も引き続き、由井市民センターみなみ野分館の活動をサポートする予定である。その一環として、本企画の地域学習ワークショップ『わんぐらをつくろう!』についても、定期的開催していきたい。また、かつて共有膳椀蔵を有していた他の地域においても、開催の機会を求めていきたい。

他方、近年、「共有の思想」が世界的な注目を集めていることを踏まえると、本ワークショップは、かつて共有倉庫を有していた地域のみならず、広く一般に受け入れられる可能性がある。拓殖大学発、八王子発の地域学習ワークショップとして認知されるよう、改良を加えていきたい。



現存する椀倉の調査



ワークショップでの子供達の「わんぐら」制作風景

支出報告書

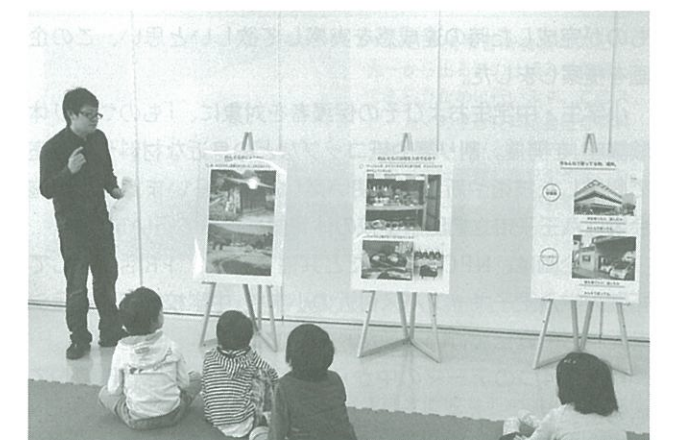
支出総額	151,207円
給付額	150,000円

[内訳]

品名	単価	個数	小計
(単位円)			
＜物品費＞			
レゴブロック			82,560
クリアケース			5,238
ハンディカート			3,360
＜消耗品＞			
プリント用紙	インク		60,049
			合計 151,207円



寺町学童でのワークショップの様子



「ぶんか展」でのワークショップの様子